学会等助成報告

第139回中部日本整形外科災害外科学会・学術集会開催のご報告

会　　長　根尾 昌志（整形外科学教室 教授）
事務局長　三幡 輝久（整形外科学教室 准教授）

2022年10月28、29日(金、土)に、大阪梅田グランフロントのナレッジキャピタル コングレコンベンションセンターにおいて第139回中部日本整形外科災害外科学会(中部整災)・学術集会を開催いたしました。中部整災は、中部、近畿、中国、四国地方にある34大学の整形外科学教室から成る学会です。今回は、コロナ禍がちょうど下火になったときで、ライブ配信やオンデマンド配信のない、昔ながらの完全現地開催で行うことができました。このような形で中部整災が開催されたのは実に3年ぶりのことでした。

お陰様でお天気にも恵まれ、コロナ前と同様1300人弱の方々にご参加いただき、久しぶりに学会らしい学会となりました。

前日10月27日(木)にはザ・リッツ・カールトン大阪で、大阪医科薬科大学整形外科学教室開講70周年記念祝賀会と合わせる形で会長招宴を開催いたしました。実は、中部整災の第1回学術集会は1952年11月23日に開催されたため、今回の学会は中部整災70周年記念の学術集会でもありました。通常年2回開催される学術集会ですが、年1回しか行われなかったことが2度あったため、第139回という中途半端な回数がちょうど70周年となったのです。当教室の開講70周年かつ中部整災の70周年という奇遇にあやかり、本学学長、医学部長をはじめ教室主任教授、関連病院の理事長・院長、同門、中部整災関係の先生方など、約270名の方々にご臨席賜りました。

学術集会のテーマは、「整形外科に新時代のメスを入れる」といたしました。

近年、社会の様々な場面でパラダイムシフトが起こり、コロナ禍がそれを加速させています。医学の分野では、AIや再生医療、ロボット、遠隔医療などの新しい技術が整形外科の範疇に入って参りました。社会的には、医師の働き方改革や男女共同参画が推進されています。整形外科医も新時代に合わせて否応なく変わって行かねばなりません。一方、近年世界における日本の存在感は地盤沈下が進んでおり、整形外科

学もその例外ではありません。これを食い止めるために、我々はこれまで以上にオリジナリティーのある、インパクトの強い仕事を発信して行くことが必要です。「新時代を受け入れるだけでなく、能動的に新時代を切り拓いて行く」それがこのテーマに込めた思いです。

基調講演は、Society 5.0を提唱された東北大学名誉教授の原山優子先生に「明日を共にデザインする」と題して、近未来の社会の形はまだ見えておらず、皆で創っていかなければならないとお話しいただきました。

特別講演Ⅰは「新世界に挑む」と題して、当教室前教授　木下光雄名誉教授と関西医科大学リハビリテーション学部学部長　飯田寛和先生にお願いいたしました。お二方とも、subspecialty領域を途中で変更され、新しい分野でご自分の道を切り拓かれました。特別講演Ⅱは「新時代開拓の経験　―医工連携を通して―」として、国立循環器病研究センター名誉所員　妙中義之先生と京都大学名誉教授　中村孝志先生に、それぞれ人工心臓、人工骨の開発とその臨床応用の経験についてご講演いただきました。どちらの特別講演も、これから新時代を切り拓いて行く若手の先生にとって大いに参考になったと思います。

さらに「新教授が新時代を拓く」という企画も用意いたしました。2019年から2021年にかけて中部整災所属の大学の整形外科主任教授に就任された先生方８人にご講演いただきました。コロナ禍によってface to faceで人と会う機会が激減しており、新教授の素顔が見えにくくなっています。そこで、これからの日本の整形外科を担っていかれる新教授の先生方に、ご自分の生き方や信念、何がしたいのか、将来の夢など若手に伝えたいことをご自由にお話しいただきました。どのご講演も各教授の個性が際立っていて大変盛り上がりました。

「医学の新時代　次世代の新技術と整形外科」「社会の新時代　これからどうする男女共同参画」などの学会テーマに合わせたシンポジウムも設けましたが、新時代を垣間見られたと好評でした。

その他主題・一般演題やポスター発表、展示会場にも比較的満遍なく人が入り、久しぶりに活気のある学会になったことを喜ぶと共に、改めてface to faceで議論、会話することの大切さを認識いたしました。

このように盛会裏に中部日本整形外科災害外科学会・学術集会を終えることができましたこと、助成をいただきました大阪医科薬科大学医師会の皆様方に心より御礼申し上げます。